



平成27年度 厚労省 障害者の芸術活動支援モデル事業
評価・発信事業 報告書

病院・裁判所・大学での展覧会



目 次

1. はじめに 1

2. 実施内容 2

1) 近畿大学医学部奈良病院

A 「HARTフェスティバルいこま」でのプレ展示

B 「ART with MESSAGE」～奈良の障害のある10人の作家の展覧会

2) 奈良県立大学

A 授業や他のアートプロジェクトとの連携

B 成果発表展「わたしのアトリエ」

3) 奈良地方裁判所

3. 評価委員会 14

4. 成果と課題 15

1.はじめに

本報告書は、「平成27年度 厚生労働省 障害者の芸術活動支援モデル事業(以下「モデル事業」とする。)における、評価・発信に関する事業をまとめたものである。このモデル事業は、奈良県において、障害のある人の創作活動の支援や支援者の育成、作品の評価や発信の方法などを年間をとおして実践している。

主催団体である一般財団法人たんぼぼの家は、「アートをとおして幸福で豊かな人生を営むことは、すべての人の権利である」という視点から、創立当初から障害のある人の芸術文化活動の発展のためにさまざまな活動を実施。全国各地での展覧会やフォーラム、当事者にかぎらず福祉、芸術関係者の意識や関わり方を変えるセミナーやワークショップ等をおこなってきた。

奈良県においては、近年行政や市民団体、各福祉施設の取り組みによって、障害のある人が日常的に芸術活動をし、発表する状況が各地でうまれてきている。しかし実際に施設や家庭などで作品をつくり、発表する機会が少しずつ増えるにつれて、作品の評価や発信のあり方について、議論する場の必要を感じる声が高まっている。平成26年度からこのモデル事業を実施していくなかでも、調査やアンケートなどで「作品をどう評価したらいいかわからない」「奈良では発表する場がかぎられている」といったニーズや課題があきらかになってきた。そこで平成27年度は、奈良においての評価や発信のあり方について、議論や実践をした。

障害のある人の芸術の評価のあり方については、一方向的な視点ではなく、多様な視点からの議論をめざした。地域の文化的背景や作品が生まれる文脈によって評価は変化することを前提とし、あらためて作品としてどう見ることができるのかを、継続して障害のある人の創作活動に関わっている人やキュレーター、アートディレクター、アーティストなどを交えて議論をした。

作品発信に関しては、美術館やギャラリーに発表の場を求めるのではなく、すでに社会のなかにある場を工夫しながら展示空間にしたり、特別な知識や技術がなくても発信ができることなど、実験的な取り組みを複数実施し、それぞれのねらいと成果・課題について本書にまとめた。

2. 実施内容

1) 近畿大学医学部奈良病院での展示

目的: 障害のある人のアートをとおして、医療空間の質を向上させ、患者や家族、医療従事者や事務職員など病院で働く人、そして地域の人にとっても豊かな空間をつくることを提案。また、アートをとおして、自分の気持ちをかたちにする、また誰かにメッセージを伝える機会をつくることをめざした。

監修: 森口ゆたか

現代美術作家。NPO法人アーツプロジェクト理事長。シカゴ美術館付属芸術大学大学院彫刻科終了。1986年の個展を皮切りに、グループ展示・個展を開催。2011年「森口ゆたか—あなたの心に手をさしのべて」(徳島県立近代美術館)等幅広く活躍。2015年4月より、近畿大学文芸学部芸術学科講師。これまでに関西を中心とする30ヶ所以上の病院で、ホスピタル・アートの企画、運営、実施に携わる。

出展作家: 植田隆介、北口拓巳、こころ185、小林弘典、蕎麦田真紀子
志賀寛、高田千恵子、松下広美、山崎康史、山村晃弘

- ポイント** ▶ 選考については監修者の森口ゆたかが温かみのある、親しみやすい表現を中心に、奈良の障害のある人の作品151点の作品から10点を選出。
- ▶ 9月に患者、家族、職員が集う夏祭りで展覧会を行い、作家が来場し交流の場をもった。
 - ▶ 10月の病院の廊下での展覧会開催中に、「メッセージの交換」をテーマに鑑賞者が作品の感想や作者へのメッセージを書くコーナーを設置。メッセージが毎日ふえていくようにした。

A 「HARTフェスティバルいこま」でのプレ展示

日 時: 2015年9月26日(土) 15:00~16:30

会 場: 近畿大学医学部奈良病院 2階待合ロビー

対 象: 患者、家族・病院ではたらく人など

概 要: 「病院に関わるすべての人に楽しいひと時を過ごしてもらいたい」という想いのもと、学生団体である社会福祉すみれ会メンバーを中心とした近畿大学生が参加し、歌声やメッセージを届けるフェスティバル(主催:近畿大学医学部奈良病院)。そのフェスティバルにあわせ、奈良の障害のあるアーティスト10人の作品と作家からのメッセージを展示。この日は、作家5人も参加し、作品解説などしながら、他の作家や参加者との交流を深めた。またフェスティバルの参加者には、作品を見ての感想や誰かに伝えたいメッセージを書いてもらい、作品の周囲に展示した。



入院中の患者さんも作品鑑賞



伊藤樹里さんによる語り



作品とともに展示された作家からのメッセージ



作品の周囲に感想やメッセージが貼られていく



絵の解説をする山村晃弘さん

B 「ART with MESSAGE」～奈良の障害のある10人の作家の展覧会

日 時: 2015年10月27日(火)～11月9日(月)

会 場: 近畿大学医学部奈良病院
2階待ち合いロビー奥の廊下

対 象: 患者、家族・病院ではたらく人など

概 要: 9月のフェスティバルで紹介した作品とメッセージを、廊下や窓に展示する展覧会を開催。会期中は、鑑賞した人たちにその場でメッセージを書いてもらい、作品近くの窓に追加していった。一人で鑑賞するだけでなく、誰かと共に話しながらみたり、誰かの想いに気付きながらみたりと、さまざまなコミュニケーションを生み出すきっかけとなるアートの役割を提案した。



レポート1: 監修の森口さんより

今回の展示は小さい規模のものでしたが、病院でこの展示をご覧いただいた方々の反響は予想以上に大きく、展覧会に関わった私達を喜ばせるものでした。

監修にあたり気をつけた点は、病院の通路という場所柄、絵の前を通る人たちに明るい気分を促すようなカラフルな色彩、グラフィック的にも優れた作品を選出しました。額縁に飾るといかにも作品然としてしまうので、小さなイーゼルに一点ずつ作品を設置し、作者からのメッセージボードも作品の横に取り付けました。更にこの展示を観た人々が、その感想を落ち葉型のメッセージカードに記し、それらが作品の背後の窓面にランダムに貼り付けられた為に、この場所は双方向性のアクティブな展示空間となりました。普段はただ通過するだけの通路が障害のある人達のアートによって、コミュニケーションの祝祭広場になりました。

[森口ゆたか(現代美術作家・近畿大学文芸学部講師)]

レポート2: 展示計画・デザイン担当の岡崎さんより

観覧者が作品の前で滞留しても緊急時の通行を妨げないよう、展示場所は廊下に面した出窓の窓台部が選ばれました。光を遮らない軽やかな展示とするため、作品はカフェの店先などでも使われる華奢なイーゼルに飾り、キャプションは特殊なクリップを用いてイーゼルから空中に持ち出しています。キャプションには作者からのメッセージと顔写真も載せ、親しみやすいデザインとしました。シンプルな展示は、作品や窓面に貼られたメッセージカードを活かしながら空間に溶け込み、また万一の緊急撤去にも直ちに対応できるものとなっています。

以前入院をした際、お見舞いに絵本などをいただきとても有り難かったことを覚えています。その時何より嬉しかったのは、皆さんが本と一緒に届けて下さったお気持ちだったように思います。

今回の展示は、ケアの場に大切なコミュニケーションや癒しを呼び起こすものとして、病院での展示の可能性を示すものとなったように思っています。

[岡崎 潤(デザイナー・造形教室主宰)]

レポート3: 病院スタッフの田花さんより

—アートを受け入れる側として、感じたこと

病院は患者安全や感染対策が最優先であり、展示には何かと制約があります。今回もまずはその点への配慮をお願いしましたが、出窓スペースを有効利用しつつ、車椅子からの視点も確保するという展示計画がとても有効だったと思います。

病院は比較的高齢者が多いものの、様々な年齢層・バックグラウンドの人々が、「診療」という目的で訪れる、開かれた場所だと感じています。また普段は「色のない」場所ですので、今回のように色彩に満ちた作品が展示されることは、美術館やギャラリーとは違い、出会いの意外性による感動が純粋に喚起されるのではないかと思います。

—患者さんや職員の意見や感想など

ただ観るだけやアンケート回答ではなく、メッセージを作品に添えるという参加型の試みによって、鑑賞する楽しみが増したことは、日々寄せられた、作品に寄り添うようなメッセージを見て実感しました。

[田花永久(近畿大学医学部奈良病院 患者支援センター)]

感想

[出展作家から]

- いろんなえをみてよかった。いろんなひとにみてもらいたい。びょういんのひとにみてもらってよかった。またきかいがあったらみてもらいたい。
- ぼくの絵を出してよかったです。また出そうと思います。期待して待っててね。よろしくおねがいします。

[作家の支援者から]

- 絵のまわりにメッセージがはられることで、どんな思いをもって観覧者がその絵を観ているか表面化するのとはとてもおもしろいと思います。病院という、様々な思いが交差する場所だからでしょうか、そえられたメッセージはとても興味深いものがありました。そういう見方もあるのか、と支援者以外の目線も知ることができました。
- 今回この展覧会に参加させていただいて、ご家族に大変喜んでいただくことができ、とても良かったと思います。今まで作品応募には消極的だったUさん。自分に自信が持てなかった部分があったのかも知れませんが、今回の展覧会を通して「大勢の方と芸術を楽しむ」という事を体感されたように思います。また、制作についても、自分なりの考えや夢など、目標を持って取り組んでおられる事を、私自身、初めて知りました。この展覧会にはいろんな発見があったと思います。

[病院スタッフから]

- 職場がこんなに華やかになりました!働くことを見つめ直すきっかけをありがとう!
- 出窓スペースを利用しながら安心して有効な展示をしてもらえました。
- 患者さんからも毎日メッセージがよせられ、鑑賞する楽しみが日々寄せられました。



2) 奈良県立大学での展示

目的: 奈良県立大学を舞台に、学生自らが作品制作やキュレーションに関わり展示をするプロジェクト。大学の教育のなかで、障害のある人の表現をとおして学生が新しい発見をしたり、自ら表現をしたり、表現を見せる方法を具体的に学び実践する機会をつくることを目的とした。

主催: 奈良県立大学 地域創造学部 都市文化commons

共催: 一般財団法人たんぼぼの家

協力: 西尾美也

美術家。奈良県立大学専任講師。1982年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁新進芸術家海外研修制度2年派遣研修員等を経て、2015年奈良県立大学地域創造学科教員。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営の他、ファッションブランドも手がける。

ポイント: ▶ 地域創造学部の半期の授業と連携して実施。

▶ 美術学部のない大学で、学生が障害のある人のアートと出会い、多様な表現と展示方法について考え、実施する機会をつくった。

A：授業や他のアートプロジェクトとの連携

概要: 奈良県立大学 地域創造学部 都市文化commons 2年生「創作演習B」は、アート作品の制作を体験して、企画立案や広報、展示、記録などの手法を学び、それらを通じて都市の現実社会やコミュニケーションのあり方を考えることを目的にしている。2015年度後期学期に、本事業の一環として、連携授業を実施した。また、同時期に開催された奈良県障害者芸術祭(主催:奈良県)にて展示されていた障害のある人の作品を鑑賞する機会をもった。

授業スケジュール(作成:西尾美也)

10月 1日	セルフポートレート					
10月 8日	学内アートツアーを企画する					
10月15日	きらっ都・奈良で作品鑑賞					
10月29日	たんぼぼの家からゲストレクチャー					
11月12日	たんぼぼの家見学					レポート①
11月19日	学内アートツアーを体験する(目隠し)					
12月 3日	チーム分け					
	出店チーム 期間中に校内の屋外に展示コーナーを作る	展示Aチーム (模写作品の展示) 障害のある人が制作した作品を授業中に学生が模写をした作品を展示する	展示Bチーム (キュレーション) 障害のある人が制作した作品を展示する方法を考える	ツアーチーム 大学内の不思議スポットを巡るツアーを企画する	広報チーム 今回の企画を学内の人たちに広く知らせる	
	幕の準備	プレスト	プレスト	プレスト	プレスト、各チームの写真記録	
12月10日	↓	展示方法、キャプション検討	展示企画	ツアーの企画	各チームへの取材、記録、発信	
12月17日	展覧会告知チラシ作成					記録
1月 7日	展覧会告知チラシのラミネート	支持体、キャプション制作	支持体、キャプション制作	ツアー実施の練習、内容の最終確認	各チームへの取材、記録、発信	レポート②
1月14日	作家を招いて幕の制作	↓	↓	ツアーのチラシ制作	学内MAPの制作、各チームの写真記録	レポート③
1月21日	出店での展覧会告知チラシの展示	会場での展示作業	会場での展示作業	他チーム(出店、展示A・B)の展示作業サポート	船橋商店街など近隣地域への広報活動、記録	レポート④
1月22日	展覧会初日					
1月28日	会場案内、監視、解説	会場案内、監視、解説	会場案内、監視、解説	ツアー実施	記録、発信	
2月 1日	搬出					

□展覧会までのプロセス

レポート①:11月12日

今回、展覧会を企画するにあたって、まずは福祉施設でのアート活動をみようという目的で、学生および教員がたんぼぼの家を訪問。90分間の授業ということで、大学からの移動時間も無駄のないように、たんぼぼの家メンバーの伊藤愛子さんと中野貴太さんが一緒にバスに乗りながら、日頃どのような活動をしているのかを伝えた。伊藤愛子さんは、NHKのテレビ番組のナレーターの仕事をしている話、たんぼぼの家での手織り作業の話など、幅広い仕事や活動をしていることを伝え、学生は驚いている様子だった。到着後、2グループに分かれてアートセンター HANAを見学。収蔵庫や、陶芸室、手織り部屋、ギャラリーについて、たんぼぼの家のメンバーから説明を受けた学生は、作品や商品、画材や道具類などの写真を撮ったり、友達と道具や作品について話したりと徐々に施設への興味が増していった。あっという間に授業終了の時間を迎え、学生は再びバスで大学へ。帰り際には「充実した設備に驚いた」という声もあがり、障害のある人の施設に対して、新たな認識を持ったようだった。



レポート②:1月7日

学内ではじまる展覧会に向け、どのような内容の展示にするのか、展覧会の肝を決める大事な時間。授業は、展覧会を告知するためのチラシデザイン原案を、学生が西尾さんに提出することからはじまった。学生は5つのチームに分かれているが、教室内では「模写作品の展示」チームと「キュレーション」チームの2つのチームが活動中。どちらのチームも、展示会場でどのように見せるのが効果的なのかを考え、意見を出し合っていた。ギャラリー等とは違い作品展示可能な壁面が学内にはないため、何に作品を貼るのか、どこにどの作品を展示すると展示意図が伝わるか、といった話し合いが繰り返された。具体的な展示プランを決めていき、イーゼルや木パネルなどを準備。美術の専門的な授業を受けていない学生が、新鮮な視点で作品を展示をした時に、どのような展覧会ができるのか、とても楽しみだ。



レポート3:1月14日

この日は出店(でみせ)チームが、出店にかかげるのれんの制作依頼をした、たんぼぼの家のアーティスト山野将志さんが授業に参加。学生の前で公開制作を行った。「模写作品の展示」チームは、木製パネルとイーゼルを実際に会場に配置し、それぞれにどの作品を展示するかを具体的に決める。「こんな感じはどうか?」「う〜ん、こっちの方がいいんじゃない?」などの会話が飛び交い、学生が各々に良いと思えるイメージを交換していった。「キュレーション」チームは、どの作品を展示するかを決めていく。作品を手にも取るのも初めての人が多く、はじめは梱包材越しに作品を眺めていたが、たんぼぼの家スタッフからの「ぜひ直接作品をみてください」との言葉を受けて、戸惑いながらも梱包材を解き作品を確認していった。広報チームを中心に各展示のタイトルを何にするのかという相談も行われ、各チーム、展示に向けての準備を整えていった。



レポート4:1月21日

展覧会前日の搬入、展示作業。各チームごとに作品や準備物を運ぶ作業からはじまり、授業時間内にできるだけ完成させることを目標に取り組んだ。自主的にすすんで作業する人、全体の流れをみながら必要な事を探し出す人、西尾先生からのアドバイスを受けて淡々と作業を進めていく人、マイペースに作業を進める人など、これまでの机の上で考える授業とは違う空気を感じた。授業終了の時間にはそれぞれのチームがある程度完成に近づいていたが、授業終了後も一部の学生は時間の許す限り作業を続けた。展示が完了している部屋では、はやくも別のチームの学生から「面白い!かわいい〜」といった感想や、大学職員の方も「みていいですか〜?」と興味深々にじっくりと眺められるといった反応がみられた。展覧会中、授業内容を知らない学生や先生方が展示にどんな反応をされるのか、学生が目にする事を考えると、展覧会は開催することだけでなく、その後の出会いも大切だと感じた。



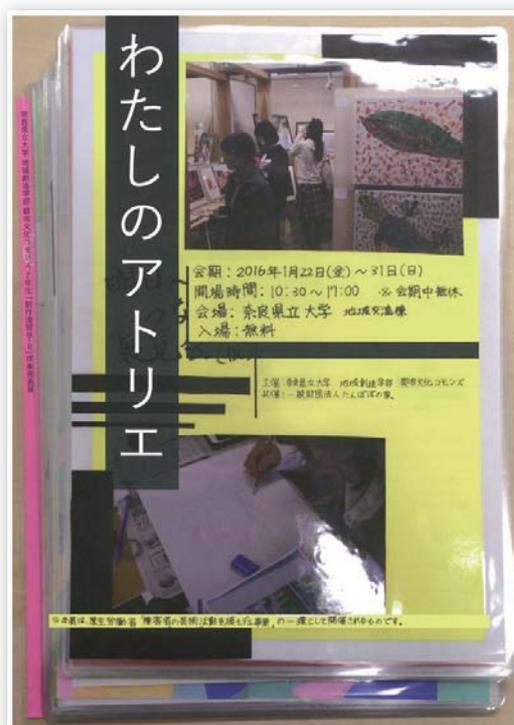
レポート:田中清佳(たんぼぼの家プロジェクトスタッフ)

B：成果発表展「わたしのアトリエ」

日 時：2016年1月22日(金)～1月31日(日)

会 場：奈良県立大学 地域交流棟

概 要：「創作演習B」にて準備をすすめてきたプロジェクトの成果発表展。学生が奈良県内の障害のある人たちのアートと出会い、表現とコミュニケーションについて考え実践。他者の表現と出会い、それを自分ごととして捉え、試行錯誤を重ねながらさまざまな形でふたたび表現してゆく過程を紹介した。



内 容

①あなたと手をつなぐなら展

学生たちのキュレーションによる、障害のある人たちの作品展。コンセプトに沿って作家を選び、展示場所を探すところから始めた。展示プランも、魚の作品だったら水槽、犬の作品だったら犬小屋、猿の作品だったら檻に入れ、バナナを添えるなど、既存の絵画展示にこだわらない発想がでてきた。表現を読み解きながら、作品が置かれる状況を考えてみることで、自分たちと作品を、作品と社会をつなげようと試みた。会場：地域交流棟1F 協働サロン



②もしゃの双子のいもうと展

準備段階として、奈良県内の障害のある人の作品展を鑑賞し、気に入った作品を選び、なぜそれを選んだかを一人ひとり発表し、それぞれの価値観を共有する時間をもった。その後、自分たちが選んだ作品を模写した。通常は技術の向上のために使われる手法だが、作品が生まれるまでのプロセスと時間を追体験することによって、作品と深く向き合い、人の表現について考える機会をつくることができた。

会場：地域交流棟3F 厨房予定地



③でみせ型アートセンター

学内の仮設アートセンター。のれんは、学生たちがアーティストを選定し、たんぼぼの家アートセンター HANAのアーティスト山野将志さんに制作依頼をした。展示会中には大学の入り口付近に置かれ、ランドマークとしての役割も果たした。内部には、学生たちが制作した展覧会チラシ38種類が並んだ。

会場：地域交流棟前



④NPUミステリーツアー

学生たちが企画した、奈良県立大学内の不思議スポットを巡るツアー作品。プロジェクトに参加した奈良市内の福祉施設、障害のある人も参加し、ディープな学内巡りを楽しんだ。

会場：奈良県立大学 敷地内



その他 「TURNフェス」への出展

2016年3月4日～6日まで、東京都美術館にて開催された「TURNフェス(主催:アーツカウンシル東京)」に参加出展した。東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディング・プロジェクトとして、全国各地の福祉施設にアーティストが滞在し作品制作をするというプロジェクトの成果展示。本プロジェクトは「美術学部のない大学の学生たちが障害のある人とアートを通して学び、実践する」というコンセプトで出展した。3日間という短い期間だったが、多数の来場者があった。



3) 奈良地方・家庭裁判所での展示

日時: 2015年12月3日(木)～12月17日(木) 8:30～17:00

会場: 奈良地方・家庭裁判所 1Fロビー

目的: 裁判所という、人間が人間らしく生きることを支える法の砦において、一人ひとりのかけがえのない表現を尊重する展示を実施することは県民の人権意識を高めていくうえでも重要な意味をもつ。また、日頃芸術作品などを展示しない場所で実施することによって、これまで障害のある人の表現に触れる機会の少ない人にも触れていただくことができ、障害のある人にとっても生きがいや社会参加につながる。

内容: 奈良県内の障害のある人の作品8点を展示した。展示されたのは、裁判所の職員のみなさんが事前に関覧し、裁判所に展示したいという視点で選んだ作品。

協力: 田中啓義

弁護士。登大路総合法律事務所所長。人は助け合ってゆくもので、その相互の助け合いの中で自分も何か人のためにできる仕事につきたいと思い、弁護士を目指す。弱い立場にある人のために助力することを大切に、「まち弁」(町の中の雑多な法律問題を解決する弁護士)として、奈良を拠点に活躍している。

出展作家: 大谷友美

原田吉三
北村篤志
山口裕樹
仲川佳那
湯浅友輔
植田隆介
倉岡正明

ポイント: ▶ 裁判所の職員94人が60点の作品から、裁判所にふさわしいと思う8作品を選出。

▶ 奈良地方・家庭裁判所ではじめての試みとなった。



3. 評価委員会

目的:本事業で実施しているさまざまなプロジェクトを振り返りながら、障害のある人の表現をどう評価し、発信していくのかを議論する委員会を設置。美術館学芸員やギャラリスト、アーティスト、アートディレクターが集まり、専門的な視点からの意見や、生活感覚に根ざしたアートの楽しみ方の提案など、多様な意見を織り交ぜつつ議論をすすめることをめざした。

評価委員:南城 守(奈良県立美術館 学芸課長)

野村ヨシノリ(GALLERY OUT of PLACEギャラリー オーナー)

森口ゆたか(NPO法人アーツプロジェクト 理事長)

西尾美也(アーティスト)

宮下忠也(アートディレクター)

実施記録:第一回 2015年12月15日(金)

これまでたんぼぼの家では、評価という言葉はあまり使わずに、アートをどう生活のなかで楽しむかを考えてきたが、本事業に取り組むにあたり、何を基準にどう評価してゆくべきかがまず議題にあがった。美術館に収蔵されることばかりが重要なのではなく、様々な評価の軸があるということが共有された。また、紙媒体以外の作品や、共同制作の作品、制作に取り組むプロセスそのものの評価についても考えてゆく必要があることが言及された。そして、障害のある人の作品は、その呼び方によって、福祉的視点、美術史的視点など、背景とする視点や評価の枠組みが変化することなどに議論が広がった。

実施記録:第二回 2016年3月9日(水)

まず、病院・大学・裁判所での3つの展示会の振り返りが行われた。病院での展示会は以前に増して院内の文化活動に関心を深めてもらえているようになったこと、大学では最初は戸惑っていた学生も展示という形になってはじめて見えてきたものがあるということ、裁判所では会期中に作家が積極的に見に行き非常に喜んでいただけなど、それぞれの反応が共有された。

また、今後の取り組みについても、これまでの事業を継続・発展させていくためのアイディアや、例えば福祉施設で働くスタッフの家族にむけてのプログラムなど新たな広がりを生む提案があり、作品を販売する機会を試行的につくってみることについても議論した。

4. 成果と課題

奈良県内において、同時代のアートが発信できる場の少なさはあきらかだが、地方行政の文化政策の問題、地域の文化的発展に対する意識の問題でもあり、すぐに解決することは難しいと考える。

それよりも奈良県内において必要なのは、どのような地域であれ、表現活動に関してサポートを必要としていたり発信の機会を望んでいるときに、限られた資材と人脈でもそれが可能であることを具体的に示していくことである。これは、奈良県内に限らず、他の自治体においても共通する部分があると思われる。どんな場所であれ、順序立ててコンセプトを共有し、対話をとおして実現可能なプランを探ることによって、展覧会やプロジェクトの協働が可能であることがわかった。また、病院であれば「治癒」、裁判所であれば「人権」、大学であれば「教育」など、その場が本来持っている役割に寄り添いキュレーションをしていくと、その場の本質が何なのかを障害者のアートによって問い直すきっかけになりうることがわかった。

さらに、アートから遠いと思われている場所でのプロジェクトや展覧会を実施することによって、より日常に近い部分で障害のある人の表現を広める機会になった。日ごろ美術館やギャラリーに足を運ばない人たちがアートにアクセスする方法やプロセスも共有することができた。障害のあるなしに関わらず、日常生活におけるアートの意味や価値、地域社会での役割そのものを広げる事例をつくることができた。

一方で、障害のある人の表現をどう評価するかという部分については、まだまだ議論や実践の余地がある。今回取り組んだ展覧会のような、日常や地域での生活感覚に根ざした価値を大切にするだけでなく、例えば作品販売の可能性について、いわゆる一般的なギャラリーなどの仕組みを参考にしながら試行することも必要な視点である。美術の世界では、作品を購入し所有するということがひとつの評価軸といえるが、奈良でも他の地域でも、障害のある人の表現に限らず、なかなか一般的に作品を買うという行動には結びつかない。

投機目的ではなく、作品の出会い方や関わり方の選択肢として、「売る」「買う」という仕組みによって生まれる文化の循環づくりをさらに検討する必要があると感じている。

平成27年度厚生労働省
障害者の芸術活動支援モデル事業 評価・発信事業 報告書

発行日：2016年3月31日

発行元：一般財団法人たんぽぽの家

撮 影：衣笠奈津美[表紙・P3・4・11・12]、西尾美也[P8・9・10・12(右上の写真のみ)]

*本書は「平成27年度 厚生労働省障害者の芸術活動支援モデル事業」の一環として制作しました。



障害とアートの相談室

Email artsoudan@popo.or.jp

U R L <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501 E-mail.artsoudan@popo.or.jp <http://tanpoponoye.org>